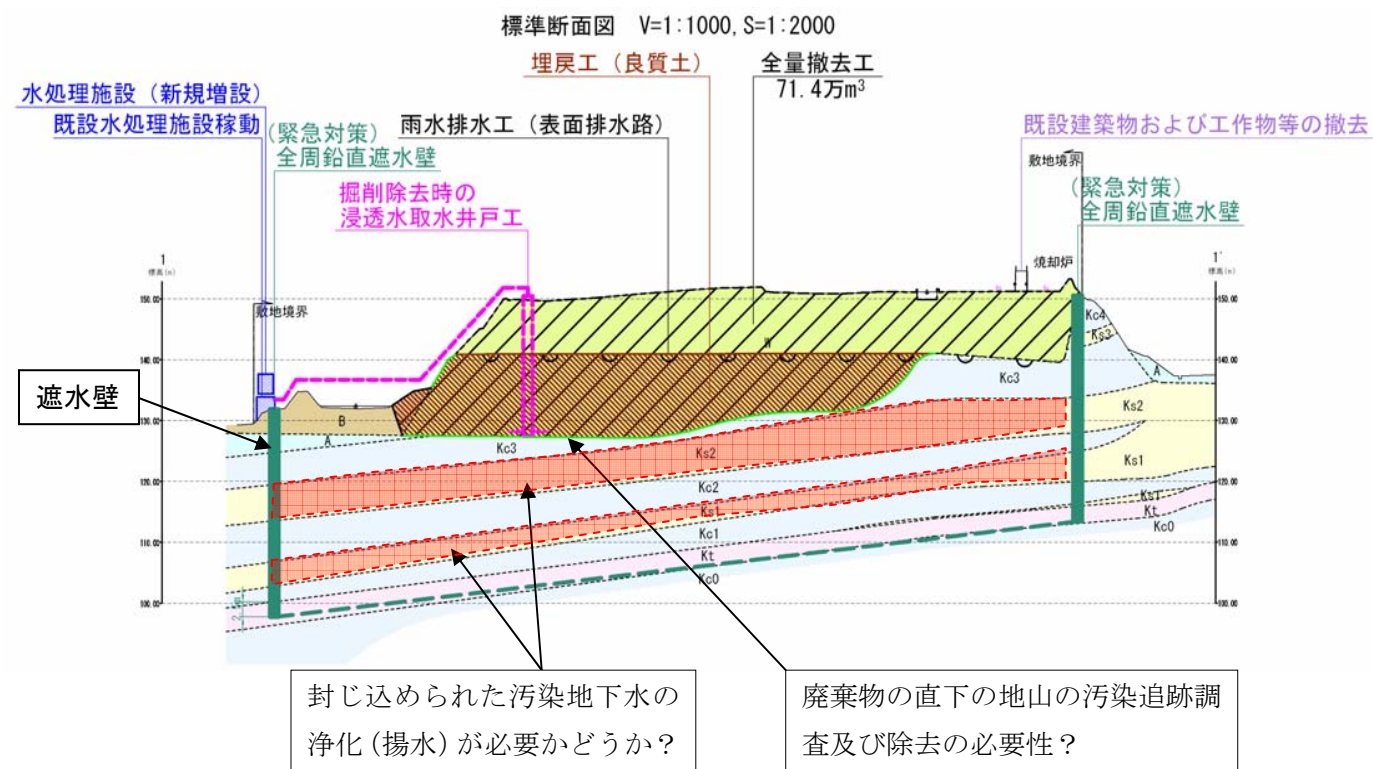


(審議事項)

①全量掘削工法での課題項目

○廃棄物の全量掘削の場合、どこまで除去対象物と考えるか？

- ・廃棄物底面の下位の地山の汚染確認方法と除去の必要性
- ・鉛直遮水壁の内側に封じ込められた汚染地下水 (Ks1層、Ks2層、Ks3層) の浄化 (揚水) の必要性



②鉛直遮水壁工法での確認項目

○対策工法として、鉛直遮水壁を採用した場合、遮水壁より外側の汚染地下水の浄化は自然浄化の考え方 (健全な地下水の希釈拡散) は妥当か？ 積極的に汚染地下水の揚水を考えるべきか？

対応案：検証としては、移流拡散シミュレーションにより、汚染濃度の低減効果を検討する。

○廃棄物の安定化の促進について

現段階の調査結果では、廃棄物内の温度は 30℃程度である。地表での有害ガスの発生もほとんどない状態であり、当該地での廃棄物の安定化促進の対策をどのように考えるか？

対応案：対策は以下の方法を考えている。

- ①廃棄物の飛散対策として覆土 (土質系) を行う。土質系の覆土のため、雨水は廃棄物に浸透し、廃棄物中に含まれる有害物質が浸透水に溶出する。雨水の浸透で廃棄物を洗浄する。
- ②浸透水は揚水井戸で汲み上げ、浸透水の浄化を行い、汲み上げられた浸透水は、適切に水処理を行う。浸透水の汲み上げ水位は鉛直遮水壁の外水位より低くすることで、より一層の汚染地下水の拡散防止を図る。
- ③廃棄物内に空気孔を設置し、浸透水の汲み上げによる水位変動 (廃棄物内の圧力差) で自然換気を促進させ、廃棄物内の好気性環境を拡大し、微生物による有機物の分解を促進させる。
- ④廃棄物内を好気性環境にすることで硫化水素の生成を抑制する。

○封じ込められた汚染地下水の浄化の必要性 (全量掘削での同課題)

対応案：対策が必要であれば、各層に対して、揚水井戸及び注入井戸を設置し、水圧バランスを図った対応策をとる。(鉛直遮水壁に水圧による偏差応力を発生させたくない)。

○鉛直遮水壁の難透水層への根入れについて

産業廃棄物最終処分場整備の計画・設計要領に基き難透水層への根入れを考える。Kt層で上面は妥当であろうか？ (詳細設計時での確定事項)

対応案：現段階は調査結果により、Kt層の透水係数より難透水層と評価される。

これより、Kt層上面から 2.5m を遮水壁の根入れとして、詳細設計段階で詳細調査により Kt層の遮水効果の連続性確認するに留めたい。

③バリア井戸工法での確認項目

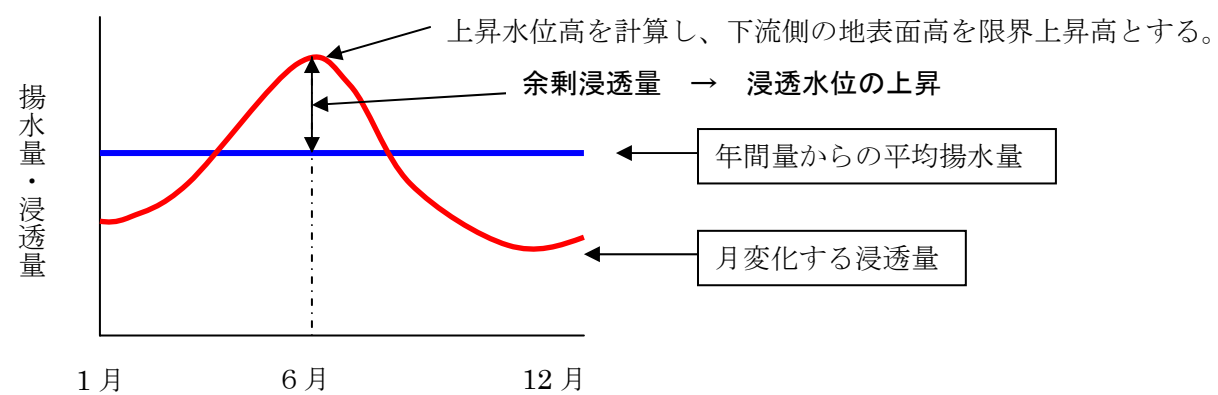
○井戸（バリア井戸や浸透水揚水井戸）の揚水量の考え方

各事象での水収支量は計算しているが、計算は年間降水量から日平均量を算出している。月最大量から日平均量を算出した値を採用すべきか？

大津観測所で6月の降水量が月最大で244mm（日平均：8.1mm/日）、年間量（1576.5mm）からの日平均量は4.3mm/日。

→浸透水の場合：浸透水の総汲み上げ量は年間量となる。

下記の関係から検討して、浸透水位が異常に上昇しないかチェックして浸透水の計画揚水量を決定したい。



→バリア井戸の場合（地下水対象）

：バリア井戸は周辺地下水の低下であるため、計画低下量から揚水量を算出するため、地下水流動量から計画揚水量を算出しない。